●◆しゃばのしがらみを、仏の願いの中でいただこう◆●

仏の願い

平成 25 年 西雲寺だより 夏号（32 号）

永代経のご案内

7 月 10 日(水)～11 日(木)

10 日 ・・・・・・・・ お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

11 日 お日中(10:00～) お逮夜(2:00～) お初夜(7:00～)

法話 鯖江 佐々木和雄師

――11 日はバスが出ますのでご利用下さい――

放送会館前発(8:50)～東別院前～工大温泉前～西安居経由
坪谷発(9:00)
常森発(9:00)～国見～鮎川～小丹生経由

万障お繰り合わせの上
お誘い合わせて
お参り下さい

親鸞聖人のご生涯

晩年の親鸞

親鸞聖人の田植え歌

あるとき親鸞聖人は、那珂川(なかがわ)流域の大部郷(おおぶごう)（茨城県水戸市）に三ヶ月ばかり滞在したことがある。大部(おおぶ)の平太郎という篤信家に招かれて一帯の念仏布教に励んでいた。

ちょうど季節は春たけなわ、那珂川沿いに広がる田に水がひかれ、田植えが行なわれようとしていた。田植えといっても、今日のように灌漑(かんがい)され、機械化されたものではない。泥田に膝までつかりながら行なう重労働であった。

聖人は村人たちの田植え風景を見ていたがある日、平太郎にこう呟いた。

「田植えをする人々の間に、一遍の念仏の声がないのは残念なことだ。難儀な仕事に明け暮れる毎日ではあろうが、よろこびがないことは悲しいことだ。また未来の大事に気がついておられぬようだ」

聖人は平太郎を振り向いて、墨染の衣を脱ぎながら、「弥陀の大悲に報謝するために、わしも田植えに加えてもらおう」といいながら、膝までつかる田に入って、村人たちに大声で叫んだ。

「わしの唄う歌についてきなされ、さすれば田植えが楽しく、はかもいくであろう。」

苗を手にした聖人は、声高らかに唄いながら田植えをはじめた。

五劫思惟(ごこうしゅい)の苗代に
兆載永劫(ちょうさいようこう)のしろをして
一念帰命のたねをおろし
自力雑行(ぞうぎょう)の草をとり
念々相続の水を流し
往生の秋になりぬれば
このみとるこそうれしけれ
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

朗々とした力強い声が、水田に響き渡る。初めは戸惑いをみせていた村人たちも、いつしか聖人の声に魅せられて、声高らかに和していたのだった。

親鸞聖人の唄う田植え歌には、命をつなぐ食料を得るばかりでなく、阿弥陀仏の永遠なる救いにふれられることが示されている。人々は、仏によって永遠に生かされる命の尊さに気がついたのであった。

平太郎の熊野詣で

親鸞聖人より「田植え歌」を授かった平太郎は「田植え歌」を唄いながら土地の人々と農業にいそしみ、お念仏に生きるよろこびを伝えていったのである。

後年、平太郎は所務(しょむ)にかられて熊野権現(和歌山県)へ参詣することになった。領主の命令とはいえ、お念仏をよろこんでいるものが、果たして神社へ参詣してもよいものかどうか、どのような心構えで参詣すればよいのか不安に思った平太郎は、参詣の途中、京都に立ち寄り、親鸞聖人にお たずねしたのである。聖人はねんごろにおさとしになられた。

「浄土の三部経、七高僧、どの教えをいただいても、私たち凡夫の救われる道は、お念仏申し、ご本願に生かされ、救われていく以外にないのです。権現とは、仏・菩薩が仮に神と姿を現して私たちを仏法に導き入れて下さるのです。決して神を軽んじてはいけません。しかし特別に精進潔斎(けっさい)をしたり、身をとりつくろう必要はありません。普段のままに参詣してきなさい」と。

そこで平太郎は熊野に参詣しましたが、道中とりたてて身を清めたり、縁起をかつぐようなことはしませんでした。ただ普段と同じように振る舞い旅を続けたのです。

さて、阿弥陀仏の親心のままに、お念仏を喜び、無事熊野に到着した夜のこと、平太郎は夢を見たのです。神殿のとびらが開かれて、正装した人が現われていうことには、「お前はどうして神を恐れずに、そのように汚れた姿のままここに参ったのか」と。

そのときその威厳のある人の前に、突然どこからともなく親鸞聖人が現われて、おすわりになり、「この人は私と一緒に南無阿弥陀仏のみ教えに導かれて生きる者です」とおおせられたのです。すると、そのお方は、手にもった笏(しゃく)を正してうやうやしく頭を下げて、ただうなずくばかりでした。そこで平太郎は夢から覚めたのです。

それは本当に不思議な夢でした。熊野からの帰り道、平太郎は親鸞聖人のもとに立

ち寄り、くわしくそのことをお話しすると、聖人は「なるほどそれでよかったのです」といわれました。これもまた不思議なことでありました。

教信沙弥(きょうしんしゃみ)への思慕

親鸞聖人には、弥陀の本願に導いていただいた龍樹、天親、曇鸞、道綽、善導、源信、法然の七高僧の方々や、法然上人のお弟子である聖覚(せいかく)法師、隆寛(りゅうかん)律師の他に、敬慕してやまない二人の人がいた。それは聖徳太子と教信沙弥(きょうしんしゃみ)である。この二人は教えの上の恩師というよりも、仏教者として、念仏者としてその生き様に大いにひかれていかれたのである。

聖徳太子は『十七条憲法』に、「篤(あつ)く三宝を敬え、三宝とは仏、法、僧なり」と記し、仏法の「和」の精神で政治をおこない、日本の礎をつくって下さった方である。親鸞聖人は聖徳太子を「和国の教主」とあがめ、太子を讃える歌を百二十首以上も詠んでおられる。その和讃の中に

救世観音大菩薩
聖徳皇と示現して
多多(たた・父)のごとくすてずして
阿摩(あま・母)のごとくにそいたもう

とあり、幼くして両親と別れられた親鸞聖人は、聖徳太子の大悲のおこころのなかに父母のすがたを重ね合わせていかれたのでありましょう。

もう一人の教信沙弥は、親鸞聖人より二百年も前の人である。奈良の興福寺で修行した学匠だったが、あるとき突然、興福寺を脱して播磨（兵庫県）の加古川近くに草庵を結び、そこで妻をめとって子供をなし、沙弥(聖・ひじり)の生活に入ったという。「沙弥」というのは僧侶の姿は保っているけれども、戒律などは棄てて妻子をもち、職業さえもっている仏教者のことです。教信は破れ衣をまとい、妻と共に村人に雇われては田畠を耕し、あるいは川を渡る人の荷物を運んで手間代をもらって生計を営んでいたのである。

しかし、朝起きて眠りにつくまで、たとえ仕事の間であろうと、終始念仏を称えることを怠ることはなく、人々は彼を「阿弥陀丸」と呼んでいた。教信が死んだとき、妻はおろおろ泣くばかりで、葬式を出す金もなく、遺体は打ち棄てられて、野犬や烏の食うにまかせる有様であったといわれる。

聖人は、この教信の生き方を追慕しつづけたのである。僧を棄て、妻子をもち、賤しめられた仕事をなし、念仏と共に生きる教信の生き様を聖人は常々自分もこうありたいと願っておられたのである。

親鸞聖人は、三十五歳のとき、承元(じょうげん)の法難によって、法然上人より賜わった善信という名を剥奪されて、越後に流罪になったことについて、「しかればすでに僧にあらず俗にあらず、このゆえに禿の字をもって姓とす」と、激しい調子で『教行信証』に書いておられる。そして流罪以後聖人は「禿」の字の上に「愚」をつけて、ご自身を「愚禿釈親鸞」と名告(なの)られたのである。「禿」というのは僧ではなくなったため頭を剃ることができず、頭髪がのびた愚かな俗人という意味を表わしている。そして「愚」とは人間としての深い自覚の世界を表わしています。それは越後に流罪になって、いなかの人々と生活を共にし、自らも妻をめとり子供をもうけ、家庭をもつことによってはじめて知らされる人間としての愚かさです。それは今まで身につけた、学問や知識など一切間に合わない、煩悩に狂わされ、業縁によって罪を犯さずしては生きられない人間の罪深さである。しかしそのような何一つ飾ることのないいなかの人々の生きざまにこそ、如来の大悲がかけられ、ご本願にすくわれていくことを共に喜びながらお念仏申していかれたのです。

聖人は「愚禿」として生きる悲しみ、慚愧を、『教行信証』の中で次のように書いておられる。

「悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し　名利(みょうり)の大山(たいせん)に迷惑して、定聚(じょうじゅ)の数に入ることを喜ばず、真証の証に近づくことを快しまざることを、恥ずべし、傷むべし」

親鸞聖人のご一生をいただくなかで、死後その遺体を河原に放置するほかにしようのなかったほど貧しい生活の中で妻子をかかえて念仏を貫きとおした教信沙弥を、自分の生きる手本として聖人は憶念し続けていたことを、私たちは尊くいただくものです。

（住職）

寄稿

宿堂町　山本　英則

先日、母の四十九日法要の際、若住職より、西雲寺便りに何か寄稿をとのお話しがありました。

思えば、五年前に父を、また、今年三月には母を相次いで見送った事もあり、両親への想いなど、少し書いてみようと思います。

父は、三十代で父親を亡くし、苦労の絶えない人生だったと思いますが、そんな中で不平不満を口にすることもなく、決して弱音を吐くこともありませんでした。六十を過ぎて、大きな怪我や病気も何度かしましたが、若い頃に戦争の悲惨さや苦しみを実際に体験してきたせいか、痛いとか、辛いとかは一度も言ったことのない、我慢強い父でした。

そんな父が生前、仏壇の前に座っているのをあまり見たことがありません。よく母に、お参りするようロやかましく言われると、

「形だけの信心より、気持ちの方が大事だ。」

と、頑として聞かなかったことを思い出します。

そんな父もお寺のことは、何より一番に心がけていたように思います。掃除など一切したことがない父が、住職がいらっしゃる日には、家の玄関のタイルをせっせとモップで磨いていた姿が、今も目に浮かびます。

母も米寿を過ぎて間もなく、ほとんど寝たきり状態となり、自宅で出来るだけの介護をして来ましたが、亡くなるちょうど一年前から施設にお世話をお願いすることになりました。職員の方々の手厚い介護によって、本当に安らかな最期を迎えることができました。

七人の子供を産み、六人を無事育て上げて、田んぼに畑仕事、そして、孫の世話にと汗を流し続け、九十六歳まで頑張った母に、今改めて、ご苦労様でしたと手を合わせたいと思います。

終わりに、数年前、報恩講の掃除の手伝いにあがったときに思ったことです。

本堂の大きな梁のほこりを落とす際、この立派なけやきの梁や太い柱が、今の時代に調達できるのか、また、このような細工ができる職人さんがいるのかと考えたとき、先人の方達の偉大さとご苦労を思いました。また、今、西雲寺の親鸞聖人七百五十回大遠忌に向けて、お内陣がきれいに修復されましたが、この本堂を新しく建立するとしたら、いったいどれだけの費用が入り用なのか、想像もつきません。

この先、このかけがえのない財産を、子の代、孫の代までしっかりと受け継いで、末永く守っていってほしいと思います。

私も今年七十の古希を迎え、朝夕、仏壇にお参りしています。まだまだ心から感謝の念仏が出来ていませんが、父の言ったこと、立て前だけのナンマンダブツとならないよう、日々精進したいと思います。

合掌

御内陣修復の経過です

（5 月中旬～6 月中旬）

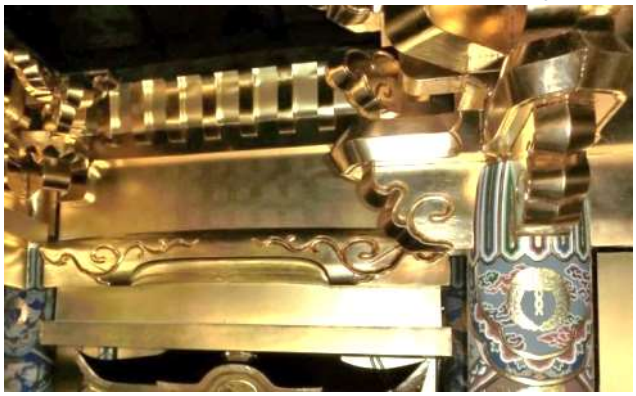
２月３日に動座式を勤めさせていただいて５ヶ月近く経過し、お内陣の修復も職人の優れた技術のもと、完成も間近になってまいりました。金箔は新しく張り替えられ、宮殿、お厨子、欄間の搬入、安置が進められています。７月始めに世話方参詣のもと動座式を勤め、７月１０日、１１日の永代経は修復されたお内陣にて勤めさせていただきます。

お内陣は、お浄土の荘厳を表わしたものです。荘厳とは形なき如来さまの真実功徳を、私たち凡夫にわかるように形をとったものです。「信は荘厳より」といわれますように、光輝くお内陣の前に身をすえると、自ずと手が合わさりお念仏が出ることと思います。永代経にはどうぞ、おさそい合せご参詣下さい。（住職）

お世話になった
金箔職人さんです

新しい巻下（マキサゲ）が貼られました

金箔職人さん
の手によって
このように！



外部に出していた荘厳が戻ってきました

７枚の欄間が見違えるように美しい色になって帰ってきました！

欄間が入れられる前の状態です

上に上がってしまうと、間近で見られないのが残念なくらいです

宮殿の大屋根です

現在、ご本尊を収める宮殿が復元されつつあるところです。

阿弥陀様を収めるお厨子（宮殿）は、現在組立中です。

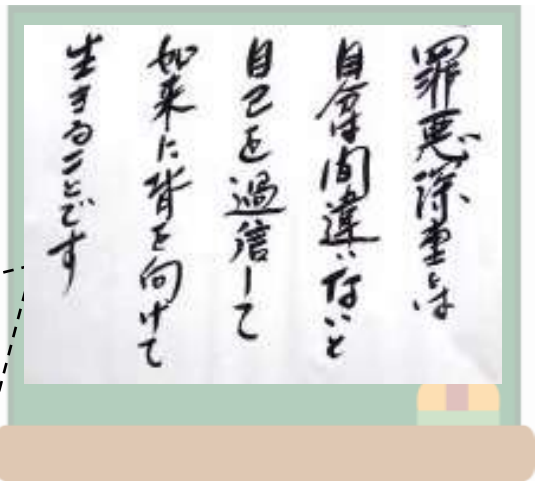
宗祖親鸞聖人を収めるお厨子がお洗濯されて戻ってきました。

現代ほど罪の意識というものが感じられない時代はありません。日常生活のなかでも、お恥ずかしい、罪が深い、業が深い、ということばが聞かれなくなりました。そしてお説教で、罪悪深重（ざいあくじんじゅう）の凡夫と聞かされても、どうもピンときません。私たちの感性が鈍くなってしまったのです。私たちはたくさんの情報が氾濫する社会のなかにあって、いろんな知識や教養を身につけ偉くなり過ぎたのです。

正信偈のなかに「邪見憍慢（きょうまん）の悪衆生」とありますが、いつも自分は間違いないと、自己主張と自己弁護をくり返して、自分だけのもの差しで人を批判して傷つけ合っているのが私たちです。罪悪深重とは、お互い我を張り、尊いいのちを、自分という小さな世界に閉じ込め、お互い傷つけ合いながら、仏さまの広やかな世界に出ようとしない私たちのことです。

（住職）

山門掲示板



西雲寺　宗祖親鸞聖人 750 回大遠忌

西雲寺のおちごさん

日にち　H26 年 4 月 27 日(日)
場所　　武周町　西雲寺
費用　　おひとり 7,000 円
申込締切　H25 年 10 月 20 日

在所の方は世話方さんまで。市街地の方や遠方の方は直接当院まで、お申し込み下さい。西雲寺のご門徒でなくても、ご親戚やお知り合いの方もご一緒にどうぞ。

お待ちしております

皆様のお志により
過去・現在・未来へと
伝統されます

口座振込のご案内

（振込手数料がかかります）

福井市農業協同組合 社（やしろ） 支店
店舗番号　6785-018
口座番号　0000337(普通)
振込先　真宗佛光寺派（しんしゅうぶっこうじは）
西雲寺（さいうんじ）　代表（だいひょう）　高橋（たかはし） 諭（さとし）

ゆうちょ銀行口座をお持ちで
ATM で振り込まれる場合
手数料が無料になります

ゆうちょ銀行
記号　13320
番号　5351911
会計の高橋（たかはし） 諭（さとし） 氏の名義です

仏教伝来 1500 年
西雲寺 350 年
先人から私達へ
私達から子や孫へ

大切なもの
遺していきたいもの

それは何でしょうか

自分の正体を見る眼
周囲のお陰を感じる眼
わたしはどちらも
持ち合わせてないのでは…

だとしたら
その眼を教えてくれる
場所や人こそ
大切なのかも知れません

750 回忌を始まりとして
大切なものを
確かめ合いましょう！

武周　西雲寺お座敷

ご本山差し向け布教

６月１４日～１７日

お同行宅のお座敷で布教がつとまるのは、全国的にも珍しいとのことです。
伝統を受け継いで開座できたのも、皆さまのおかげです。

北海道士別市
富永俊麿師

安田　末定高領氏宅

本堂　横山栄二郎氏宅

真宗仏光寺派 福井教区門徒研修会

６月22日(土)10時～15時半
福井・南江守　仏照寺様にて
講師　宮戸道雄（みやとみちお）師

西雲寺からは24名もの方がお参り下さいました。
「法然によってひっくり返されたのが親鸞、じゃ、あなたにとっての法然は誰ですか？」
宮戸先生のお声が耳に残ります。

発　行
真宗仏光寺派 専念山 西雲寺（さいうんじ）
住職　護城一寿
筆頭総代　吉川芳弘
編集責任者　護城一哉
〒910-3523　福井市武周町５－２
電話　0776-97-2138
メール　kmgojo@mx3.fctv.ne.jp
ホームページ　http://arukou.net/

次世代の方、分家された方に！
お寺から郵送いたします。どうぞご遠慮なくお申し出下さい。

みなさんの声 大募集！
原稿や作品はもちろん、ご意見、ご感想など、どしどしお寄せ下さい。郵送でもメールでも構いません。お待ちしております。